

令和元年6月19日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370239

研究課題名(和文)成島家を中心とする近世中後期幕臣文化圏の研究

研究課題名(英文) Research on the early modern culture area of the retainers of the shogunate, led by the House of Narushima

研究代表者

久保田 啓一 (KUBOTA, Keiichi)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：80186452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：成島信遍に代表される成島家の歴代が、近世中後期の幕臣文化圏でどのような活動を展開し、どのように位置づけることができるかを、同時代の幕臣文人や諸藩の武士の活動とも関わらせながら総体として論じた。

具体的には、成島信遍の年譜形式の伝記研究、和文の会の成果である「ひともと草」の注釈研究、幕臣文化圏の最上層に位置する田安德川家の人脈に即した文学活動の跡付け、江戸を中心に諸国へと拡大を見せる雅俗文化の内実の検討など、成島家の歴代を中心に据えつつ多岐にわたる成果を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

成島信遍という人物は、一般にはほとんど知られていない。しかし、信遍の事績を調べれば調べるほど、近世中期の江戸で彼がいかに好学の武士の尊敬を集めたか、いかに広汎な人脈を基礎として豊富な学芸活動を展開したかが知られ、信遍及び成島家の歴代を通しての江戸文壇の考究が有効な方法であることを如実に知ることができた。

信遍の生涯を辿る伝記研究の完成は、続く研究テーマとして設定済みである。

研究成果の概要(英文)： This research covers achievements what Narushima Nobuyuki and his descendants made in the culture area of the retainers of the shogunate, in connection with literary men in the same period.

Concretely, it contains a chronological record of Narushima Nobuyuki, a note on an archaism Hitomotogusa, literature of the Tayasu-Tokugawa house, and refined and vulgar literature of local culture area, dealing with Narushima family.

研究分野：日本近世文学

キーワード：成島信遍 成島家 幕臣 近世中後期 近世文学 江戸

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

八代将軍徳川吉宗に仕える幕臣成島信遍とその子孫たちが、幕府の文化行事の中核にあって様々な活動を展開した事績について、これまでに著書や論考で言及してきたが、その作業によって、近世中期の江戸幕臣文化の最も上質な部分を信遍たち成島家の歴代が担ってきたことを明らかにできたと考える。そして、信遍の持つ豊富な人脈に登場する多数の人々を通して、雅俗両面にわたる江戸文化の真髄を総体として捉えることができると確信し、本研究を申請した。

2. 研究の目的

近世文学は支配層である武士の活動を中心に記述されるべきであるという認識は、町人主体の近世文学観がようやく相対化されつつある現在、かなりの程度広まっているといえる。しかし、特定のジャンルに限定した研究のみが深められ、総体としての武士の文学をどのように見るべきかという問題については、未だに十分な回答が得られていない。

18世紀から19世紀前半にかけての武士の文学活動の中心に幕臣と譜代大名が位置していたとの見通しのもと、徳川吉宗時代に幕臣文化圏の中核にあった成島信遍以降、和鼎・勝雄・司直・良譲そして柳北に至る成島家歴代もまた、それぞれの生きた時代の中で幕臣文化の体現者であったことに鑑み、彼らを柱に据えた立体的かつ総合的な文学史を構築したい。

3. 研究の方法

本研究は、次のような階段を踏んで展開された。

(1) 成島信遍の事績に関する資料調査と収集、およびそれに基づく「成島信遍年譜稿」の続稿執筆と公表

元文3年(1738)5月から延享2年(1745)3月までの伝記事項を「年譜稿」の形で発表した。信遍の生涯のうち、最後の15年ほどを残すこととなった。

(2) 和鼎・勝雄・司直・良譲・柳北歴代の著述収集と分析

成島家歴代の主な活動の場は奥務めであるが、人脈はその枠を超えて極めて広汎に及んでいる。その人脈に沿って展開された文事に関わる著述の複写を収集し、信遍の事績に依拠することが明白な事例を集めることに主眼を置いた。しかし、収集は完成していない。

(3) 同時代の主要人物との交渉の跡付け

成島家の家格が飛躍的に高まったのは、諸大夫となった司直からである。それ以前とは歴代の交流の相手の身分が大きく異なる。良譲が福井藩の松平慶永やその実家である田安徳川家の文化活動と接点を有したのには、その身分上の変化が理由として挙げられる。そのような見通しのもと、成島家歴代の調査から発展する形で福井藩・田安家などの資料収集と検討に従事した。

また、成島家と直接の接点はないにしても、同時代の朝廷公家文化の内実や地方学芸界の動向を調査するべく、冷泉為村と桜町院、八戸藩南部家や出雲歌壇の資料収集にも従事した。

(4) 雅文学の表現意識を探るための和文集『ひともと草』注釈

大田南畝主催「和文の会」の成果である『ひともと草』は、幕臣と町人、歌人と狂歌師・戯作者など、身分や文学的立場の異なる多様な作者たちが、慣れないながらも精一杯和文を著したという点で貴重な存在である。文学研究の柱の一つである表現論の実践として注釈を試みた。

上記の(1)から(4)までの調査を通して、近世中後期の幕臣文化圏の問題を、文壇史と表現論の両面から追究することが有効であるという認識に至った。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」で示した各項に従って、研究成果を概観する。

(1) 成島信遍の事績に関する資料調査と収集、およびそれに基づく「成島信遍年譜稿」の続稿執筆と公表

本研究の中心をなす「成島信遍年譜稿」で扱ったのは、元文3年5月から延享2年3月まで、7年ほどの事績に過ぎない。判明する事績を、依拠する資料本文を掲出しながら逐一追っていくため、年1回の「年譜稿」発表では紙幅が不足したためであるが、信遍の事績の数そのものが、元文から延享にかけて著しく増大したことも関係する。50代の信遍は、幕府と朝廷・冷泉家を結びつける役目を十分に果たしたり、新田開発に関する政策に積極的に関与したり、幕府の公式行事に和文の記録者として参加したりと、極めて多角的な活動を展開するようになった。老年に入る前の最も充実した時期といつてよいであろう。たとえば、寛保元年(1741)・同2年(1742)の、日常的な業務である幕府書物方との交渉や個人的な交友の記録を除外した代表的な事績を挙げれば次の通りである。

『武陽飛鳥山十二景倭歌』に「鴻台秋月」題で和歌出詠(寛保元年2月1日)。

浜離宮の象を中野に移す作業を見物し、和文「象」を執筆(同4月27日)。

竹千代(後の家治)元服儀式の後、幕臣の同僚と江戸湾で舟遊びをし、紀行文「海づと」を執筆して冷泉為久に献じ、返歌を賜る(同8月12日)。

為久を迎えての当座歌会に出詠(同8月13日)。

藤巻教真の教えを踏まえて加納遠江守へ新田開発について上書提出(同12月18日)。

「古梅園続墨譜序」撰文（同冬）。

『蛻巖先生文集』巻1～4刊行、梁田蛻巖との交流を示す諸作を収録（寛保2年6月）。

冷泉為久1周忌追善勸進和歌に「対月言志」題で出詠（同8月29日）。

まず、信遍などで、和漢双方にわたる文学活動がいかに多彩であったかを知ることができる。また、信遍のような文学以外の領域にも信遍の関心は向いているし、信遍や信遍などで描かれる幕府の文化事業に何らかの足跡を残す信遍の位置がうかがえる。なお、信遍に示される冷泉家との関係が、信遍が近侍する徳川吉宗の意を体しての、半ば公務に近い要素を有していたことは、本研究に先立つ種々の研究で明らかにしてきた事柄である。

以上のような各項について、関連する資料の本文を逐一引用し、資料集としての要素も組み入れつつ、考証を加えた。その過程で、たとえば地震学の研究者から問い合わせを受けたりするなどの経験も持ち、信遍の伝記研究が江戸の文化全般の解明に資するところが大きいことを実感できた。

宝暦10年（1760）9月の死去までの15年ほどの事績に関する資料の大半は収集済みであり、考証と論述を残すのみである。

（2）和鼎・勝雄・司直・良讓・柳北歴代の著述収集と分析

信遍以降の歴代は、信遍をこの上ない手本として仰ぎ、信遍の代と同種の行事、たとえば日光社参などに参加する場合、常に信遍の業績が参照され、文章の面でも依拠するところが大きいことが分かった。いわば成島家の家学として継承しようとする歴代の意識が見て取れる。

さらに、司直・良讓とほぼ同世代の幕臣新見正路なども同様の発想を身につけていたことが確認され、成島家歴代の枠を超えて幕臣間に共有されていたことがうかがえたのも意義深いことである。司直に関する伝存資料の多さは周知のことであるが、これまで確たる資料に乏しかった良讓の事績が福井藩との関係で若干補われたのは有意義であった。

（3）同時代の主要人物との交渉の跡付け

信遍と同時代の陸奥八戸藩主南部智信、成島良讓と同時代の越前福井藩主松平慶永、慶永とは田安徳川家の縁で連なる筑後柳川藩主立花鑑寛など、最上層の武家たちの文芸活動の諸相を辿ることも、成島家歴代の文化圏との対比の上で意義深いものとする。さらに、武家歌人の上位にある冷泉為村、そして為村に宮廷和歌の指導を委ねた桜町院の存在は、身分階層と一体化した彼らの文学観と成島家のそれを比較するのに有益な観点をもたらしてくれる。

なお、出雲大社の周辺で形成された手銭家中心の歌壇の資料は、地方を遊歴する歌学者・歌人・俳諧師の指導の跡を色濃く留め、近世の和歌が徐々に俳諧や狂歌と同種の文化として享受されるようになる地方文壇の様相を実感させるに十分であった。身分と地域によって様々に異なる文化圏同士を突き合わせて相対化する視点が得られることに意味を見出すことができた。

（4）雅文学の表現意識を探るための和文集『ひともと草』注釈

『ひともと草』の注釈を本研究の一つの柱として継続してきたこと理由は、成島家の歴代とは文化圏を異にする下級幕臣である大田南畝とその交友圏の内実を見定めるのに最も有効であると判断したことにある。信遍を始めとする江戸冷泉門武家歌人たちは、和歌活動を基本として、和文についても歴大な蓄積を有する。それらを、典拠を確認しつつ詳細に読み解く作業が求められるが、解読の基本をなす表現論の確立は成されていない状況である。まずは、検証に適した規模の和文集で、しかも江戸の武家文化圏の周縁に生まれた『ひともと草』の精読から始めるのが現実的な対応なのである。

本研究期間内に詳注を加えたのは、大田南畝「六阿弥陀詣」、酒月米人「ひゝないち」、唐衣橘洲「上野山花」の3編である。中でも「上野山花」で南畝と橘洲の和文に関する表現意識の違いが鮮明となったことの意義は大きい。橘洲の和文の特徴を常識的な修辭と分かりやすい典拠とに見出すことにより、教養と身分に恵まれた幕臣には必要以上の穿ちをよしとしない感性が働くのではないかとの見通しを得た。武士の表現論に切り込む突破口となると予想できる。

以上のように、資料の調査研究は成島家関係に限定されることなく、当時の和歌の享受の種々相を炙り出すことに効果を発揮し、続く成島信遍研究の下地を築くのに役立った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計15件)

- (1) 久保田啓一、大田南畝編『ひともと草』試注(十六) - 橘洲「上野山花」 -、鯉城往来、査読無、21号、2018、88～106頁
- (2) 久保田啓一、成島信遍年譜稿(十八) 広島大学大学院文学研究科論集、査読無、78巻、2018、23～41頁
- (3) 久保田啓一、冷泉為村と桜町院、飯倉洋一・盛田帝子編『文化史のなかの光格天皇朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』(勉誠出版) 査読無、2018、47～64頁
- (4) 久保田啓一、大田南畝編『ひともと草』試注(十五) - 米人「ひゝないち」(下) -、

- 鯉城往来、査読無、20号、2017、61～75頁
- (5) 久保田啓一、成島信遍年譜稿(十七) 広島大学大学院文学研究科論集、査読無、77巻、2017、1～16頁
 - (6) 久保田啓一、大田南畝編『ひとつもと草』試注(十四) - 米人「ひゝないち」(上) -、鯉城往来、査読無、19号、2016、43～54頁
 - (7) 久保田啓一、成島信遍年譜稿(十六) 広島大学大学院文学研究科論集、査読無、76巻、2016、15～25頁
 - (8) 久保田啓一、幕末田安文化圏史構築の試み、柳川資料集成月報(柳川文化資料集成第1集の2・付録)(柳川市) 査読無、22、2016、1～6頁
 - (9) 久保田啓一、大田南畝編『ひとつもと草』試注(十三) - 藤原覃「六阿弥陀詣」(下) -、鯉城往来、査読無、18号、2015、33～45頁
 - (10) 久保田啓一、成島信遍年譜稿(十五) 広島大学大学院文学研究科論集、査読無、75巻、2015、1～12頁 2015
 - (11) 久保田啓一、八戸藩南部家の南部智信関連和歌資料について(下) 国文学攷、査読有、226号、2015、17～24頁
 - (12) 久保田啓一、八戸藩南部家の南部智信関連和歌資料について(上) 国文学攷、査読有、225号、2015、15～28頁
 - (13) 久保田啓一、手銭家歴代の和歌活動、手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業(公益財団法人手銭記念館) 査読無、2015、24～31頁
 - (14) 田中則雄・芦田耕一・久保田啓一・伊藤善隆・佐々木杏里、シンポジウム 江戸力～手銭家蔵書から見る出雲の文芸～、手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業(公益財団法人手銭記念館) 査読無、2015、50～70頁
 - (15) 久保田啓一、大田南畝編『ひとつもと草』試注(十二) - 藤原覃「六阿弥陀詣」(中) -、鯉城往来、査読無、17号、2014、32～48頁

[学会発表](計4件)

- (1) 久保田啓一、田安文化圏の大名歌人たち、柳川市歴史文化講演会(招待講演) 2016
- (2) 久保田啓一、幕末福井歌壇における橘曙覧の位置、日本近世文学会春季大会、2015
- (3) 田中則雄・芦田耕一・久保田啓一・伊藤善隆・佐々木杏里、シンポジウム 江戸力～手銭家蔵書から見る出雲の文芸～、特別企画展「江戸力 - 手銭家蔵書から見る出雲の文芸 - 」シンポジウム、2014
- (4) 久保田啓一、手銭家歴代の和歌活動 - 歌壇史上の意義を中心に -、特別企画展「江戸力 - 手銭家蔵書から見る出雲の文芸 - 」連続講座、2014

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。